

Eureka XII

六年制通信 No.39 令和7年2月21日(金)号

評価

私が子どもの時は「通信簿」でしたが、今は確か「通知表」でしたか。こういう名前はどのような理由で変わっていくのでしょうか。どっちでも同じだと思うのですが。教科の成績や出欠状況などが記載されているわけですが、この「成績」のつけ方が時代とともに変化しています。「最新のものは最高のもの」という考え方は、例えばスマホのような文明の利器に対しては当てはまるのかもしれませんが、人間に関することには該当しないと思います。「最新のものは最高のもの」であるのだから、それらを使っている現代人は史上最高の人間、とはならないということです。様々なツール（つまり便利グッズですね）を開発してきて、それらを楽しんでいる現代人は、今の目から見れば不便な生活をしていた昔の人よりも人として優れているのでしょうか。そんなことは全くありません。文明の発達と人間の精神的な成長とは無縁と言っていると思いますし、むしろ一つの便利を手に入れるたびに人は訓練して得た一つの能力を失ってきたのではないかとさえ思います。

学校における生徒の評価についても「最新のものは最高のもの」ではありません。私たちの世代は（親御さんもそうですが）学校の成績は絶対評価で行われました。今は絶対評価で行うことになっています。この二つ、全く違う評価方法なのです。あらゆる面で絶対評価が相対評価を凌駕するのかというと、そんなことはなく双方にメリットとデメリットがあります。少し整理して考えてみましょう。

私の世代がなじんできた相対評価というのは、学校の5段階評価で考えると、成績上位から順番に並べて上位数パーセントを5、次の数パーセントを4というふうにつけていくやり方です。集団の中で競い合うことが前提です。従って3よりも5の方が集団の上位にいたことがわかります。当たり前ですが5がついた教科は得意教科なわけでもテストの点数もよいこともわかります。ここには評価をする側の主観が入る余地はありません。誰がつけても5の生徒は5です。よくオール5などと言いますが、その生徒はおそらく学年で一番成績がいいということがわかります。しかし相対評価にもデメリットという弱点があります。わかりやすい例で言うと、対象となる生徒が少ないとあまり意味を持ちません。生徒数が10人のところと200人のところでは5の意味が違ってきます。人数だけでなく、集団によって5の意味は違います。A高校の5とB高校の5は同じ学力ではないでしょう。A高校では3でも、同じ学力の生徒がB高校にいたら5になるということはおく普通に考えられます。したがって、自分はどの集団で5なのか3なのかということを意識しないと、本当の学力はわかりま

せん。ですから、たとえオール 5 の生徒でも全国模試を受けると惨憺たる結果になるということがあるわけですね、学校によっては。また、これは仕方ないことなのですが、普通集団は学年で切り取られています。ということは学年によっても 5 の意味が違ってきます。同じ生徒が一年前なら 5 だった、一年後なら 4 だっただろうということも普通に起こります。これが相対的な評価の宿命ですよ。スポーツで、同じ技量の選手が学年によってレギュラーになれたりなれなかったりするのと似ています。

絶対評価は集団の中で競い合うことを前提としていません。まず達成すべき基準を設定し、そこまで到達すれば 5 がつきます。水泳の授業があって、500m 泳げることを達成の基準としたとしましょう。すると 500 メートル以上泳げた生徒には 5 がつくわけです。理論的にはクラス全員に 5 をつけることが可能です。実際にはそうならないように慎重に基準設定をするわけですが、絶対評価では他者との競争という概念が不要になります。自分の達成すべき数値があるのでそれを目標に努力をすればいいわけです。集団の人数も関係ないし、A 高校であろうと B 高校であろうと気にする必要はありません。そんな絶対評価にもデメリットはあります。水泳の話に戻ると、500m をクリアした生徒は何人でも 5 がつくのですが、5 の範囲がわからなくなります。つまり 10 キロ泳ごうが 501m 泳ごうが評価が同じになります。相対評価は例えば上位 7% というふうに集団のどのあたりにいるかはわかるのですが、絶対評価はそのあたりが少し不透明になります。また、500m でクリアすると知ると 501m で満足する危険性があります。目標とする基準が上限のリミットととらえられるのではないかと、それ以上の努力をしなくなるのではないかと、これが心配されますね。

今週のおすすめ

・湊 かなえ 『リバーズ』 (講談社文庫)

湊さんと言えば『告白』ですよ。何と言いますか、全く救いのない小説で、いわゆるイヤミスの典型ですわな、あれは。イヤな後味が残るミステリーのことね。

今回の『リバーズ』はどんでん返し小説として成功していると思います。大学のゼミ生の仲間で別荘に行くのですね。ゼミ生の一人の叔父が所有する別荘です。そこで事故が起こるのですが、その原因を隠しながらゼミ生たちは就職をし、それぞれの生活を始めています。深瀬和久もその一人。全く目立たない存在の自分にとって唯一の取り柄は美味しいコーヒーを淹れられるということ。そして、それが紡いだ縁か、素敵な彼女ができます。しかしある時彼女のもとに「深瀬和久は人殺しだ」という告発文が送られます。問われるままにあの事故の真実を語る深瀬は恋人に去られると同時に、自分が失った親友のことをほとんど知らないということに愕然とします。彼の故郷に行き中高の友達に会い、深瀬の知らなかった親友広沢のことを聞いて回ります。

その後、驚きの事実が次々に明かされますが、戻ってきた恋人と思いの喫茶店でコーヒーを飲んでいるときに最後の、救いのない事実で深瀬は気づいてしまいます。あの終章を読まなければよかったと思いましたが、湊さんの構想力にも驚きました。

BGM は ZARD の 負けないで でした…。